

全体として、AR の分野における興味深い発表が聞けたが、ポスターセッションがなかったせいか、聴衆の数が少なかったのが気になった。

◆2日目ペーパーセッション報告

村山 淳

(東京工業大学)

ICAT 2日目は4つのペーパーセッションとバンケットトークという密度の濃いプログラムであった。発表は全てで19件、主にインタラクション・応用システムについての発表が行われた。日本からの発表が13件と多かったが、次いで韓国より3件、フランス、スイスより1件ずつの発表があった。

筆者は、本会議で初めての国際会議であって非常に緊張した気持ちで会議に臨んだ。

朝一番のセッションは、ヒューマンコンピュータインタラクションの関係の発表が4件あった。歩行インタフェースやキャラクタの歩行生成など、人間の動きに関する研究が3件、嗅覚インタフェースに関する研究が1件あった。

午前2番目のセッションは、力覚のモデルとレンダリングで、4件の発表があった。2件が弾性体、切削時の力覚レンダリング、トルク提示装置の出力パターンについての研究が発表された。専門的な内容が多かったが、計算モデルなどの踏み込んだ内容についても活発な議論がなされた。

昼食を挟み午後のセッションは触覚インタフェースのセッションで、筆者も含め6件の発表があった。このセッションでは、先進的な触覚インタフェースについての発表が行われた。

午後2番目のセッションは応用分野の発表で、5件の発表があった。手術やリハビリテーションなどの医療応用が3件あり、その後1件ずつ、没入型空間の品質改善と実時間シミュレーションの為にクラスタコンピュータアルゴリズムといったシステムについての発表が行われた。

今回のICATは私自身初めての英語での発表というこれまで経験したことのない世界であったため、英語能力やプレゼンテーション能力など非常に不安があった。しかし、会場内では様々な方面から活発な議論ができ、非常に有意義な発表を行えたと思う。

また、普段研究室で得られる視点だけではなく、多くの視点から様々な研究が行われているということを知り、大変有意義な一日を過ごせた。

◆バンケットトーク報告

牛田啓太

(東京大学)

「ことば」には力がある。メディア(伝達媒介)としてのことばの力を、認めない人はいるまい。それに加えて、わたしたちは、ことばの力に束縛されてすらいる。

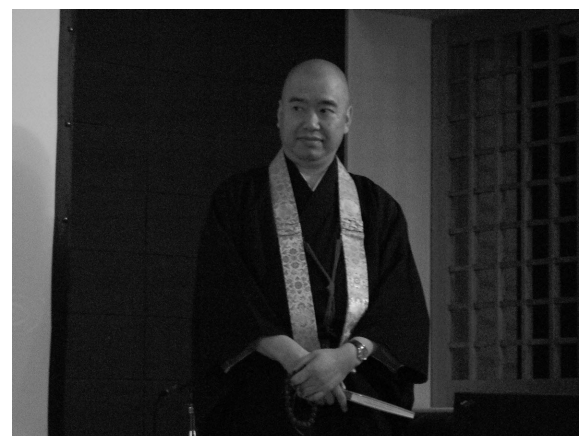
ソシユールは、投げ込まれた社会でのことばによって価値観・考え方が拘束されることを説いたし、デリダは、無限にあるエクリチュールから一つを選び取った瞬間に、思考・行動までもことばに支配されると言った。

高野山高校校長、真言宗僧侶・添田隆昭氏の講演は、「水」から始まった。

雪の結晶がそうであるように、氷結させた水は六角形状である。添田氏のお話は、江本勝氏の「水の結晶」にまつわる実験を引きながら進んでいく。

一般に、「美しい水」の結晶は、端正な形状である。これに、ことばをかけると、どうなるか。感謝のことばを注ぐと、結晶は美しくなる。一方、罵言を浴びせると、結晶の形は崩れ、幾何学的形状すら失う。この現象は、音声としてのことば、書き文字としてのことば、さらにはどんな言語であるかすら、問わない。

さらに、汚水—その結晶は水の結晶の姿をしていない—に、祈りをささげる。愛を込める。でもなおおそらく、汚水は飲めない。しかし、その結晶は、大きく変貌する。六角形の姿を現すようになる。なぜか? 水がことばを解するのか。これを、非科学的な、オカルティシズムと一蹴するのは、簡単である。しかし、わたしたちが眼前で、これを見たとしたら、いかなる姿勢で向き合



真言宗僧侶・添田隆昭氏